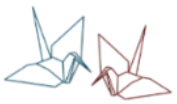




未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 夏休み号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和8年7月17日発行



自分の非に向き合うこと

長男が小学生の頃、長男のしたことで他のご家庭に謝罪に行ったことがあります。跳び箱の運搬台に友だち何人か乗せて、後ろから勢いよく押し進んでいくのを楽しんでいたようです。(まったく!!) 自分たちが進んだ先に、他のお友だちがいて足首あたりに運搬台がぶつかってしまいました。何人かが乗っていた台がぶつかったので、そのお子さんはとても痛かっただろうと思います。学校からの連絡を職場で受けました。大きなけがはないと聞いて胸をなで下ろし、仕事を切り上げて息子を連れて謝りに行きました。

僕は、いつも保護者のみなさんに、子どもたちが「自分で考えて、判断して、行動できる」よう支えてほしいとお話ししています。その意味で言えば、子ども同士の問題は、状況を把握して子どもを支えながら、本人が自己選択・自己決定することを大切にさせていただきたいと思っています。しかし、相手に怪我を負わせてしまったり、自分の幸せを人の不幸の上に築こうとしたりするような行為については、子ども自身に十分考えさせるのはもちろんのこと、同時に親として、ひとりの人間として「断固としてそこは許せない」という親の思いやメッセージを伝えるとともに、してしまったことについてどうするか、行動として子どもに見せる必要があると思っています。

だから僕は息子に、自分の父親が、自分がしたことの責任を取るために、仕事を切り上げて帰宅し、「頭を下げて謝る」その姿を見せたいと思ったのです。

「自律」する子をめざす時、自分がしたこと、自分の非を自分で認め、その責任を取れるようにならなければなりません。そうできるために、間違った自己選択の結果生じた出来事について、その責任の大きさ・重さをきちんと受け止めさせておく必要があります。一緒に謝罪することで、その重大さ、自分の行動の誤り、これからどうしていくべきかなど、きちんと考えさせる機会にしたいとの思いでした。

僕の息子のように、一方的に何かしてしまう場合は非が明らかですが、子ども同士関わり合ったトラブル等では、全面的に悪い、よいというように切り分けることは、なかなかできません。双方ともやったやられたが入り組んでいて、子どもがそう行動してしまったきっかけが、子どもそれぞれにあることが多いからです。以前にもお話ししたように、子どもは自分に都合の悪いことは、親

御さんに話さないことも、自分のしたことは矮小化して話すこともありますから、学校がお伝えした内容と齟齬が生じることも多々あります。お子さんの話だけでは、本当のよい・悪いは分からないと言わざるをえません。

そんな時は、まずお子さんの話をそのまま受け止め、お子さんの感情の立て直しを図りましょう。「それは嫌な気持ちだったね。」とお子さんの気持ちを受け止めるのです。そして、事の経緯がどうであったか(基本的にこれは、学校が複数の教員で聞き取ります。)というより、お子さんが自分のしたことについて「悪かった」と思う部分は全くないか問いかけ、そこに焦点化して話せるとよいと思います。「手をだしたのは悪いと思うけど、〇〇が先に手を出してきたからなんだ。」等、理由を言うこともあるかもしれませんが、しかし、自分が取った行動は理由があればよいことなのか、例えば、相手が怪我を負うほどだったとしたら、それは許されることなのか等について、改めて問いかけ、自分を誤魔化さず、悪かった部分は悪かったと振り返らせる必要があると思います。それが、自分の行動に責任をもつということです。理由があればよいとしてしまったら、自分のしたことの本質について気づけないままになってしまいます。

間違うことも、失敗することも、未熟な子どもたちの当たり前です。だから、うちの子が悪い、相手の子が悪いという発想ではなくて、うちの子のこの部分はまずかった、そういう選択はよくなかったと親子でしっかりその非は認め、共有できることが大切だと考えます。子どもたちは、そういった出来事を経験し、その都度自分自身を繰り返し振り返りながら、よりよい自己選択自己決定を学んでいくわけです。

保護者のみなさんは、学校からこんなことがあって・・・と連絡があると、不安になったり心配になったりされるだろうと思います。自分の子どもの正しさを信じたいこともよく分かります。しかし、これをチャンスと捉えられないでしょうか。あなたはそう感じたんだねと子どもの思いを受け止めるのと同時に、相手の気持ちも想像させ、相手には相手の思いがあることに気付かせられたらどうでしょう。相手が悪いと思っている状況から、自分が悪かったところに改めて視点を変えさせ、客観視させたらどうでしょうか。

それは、これから先、今以上に多様な人の中で生きねばならない子どもたちにとって、自分が納得して、相手も納得できるように調整しながら人と関わる力を、少しずつ養うこととなると考えます。